## 長い距離を旅行した女性

## イザベラ・バード 日本奥地紀行 全行程 4500 km

八柳 修之

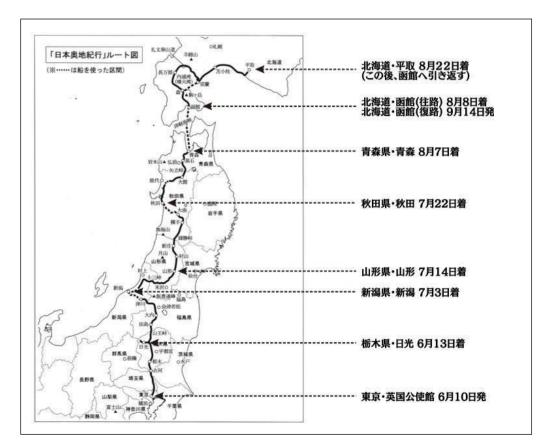


イザベラ・バード。19世紀〈1831~1904〉英国の旅行家、探検家、旅行作家、ナチュラリスト。1854年から1901年まで海外を旅行。南米以外の全大陸に及んだ。23歳のときに行った北米旅行を皮切りに72年の生涯の多くを旅のうちにすごした。日本には47歳のとき、1878年(明治15)6月~9月にかけて通訳兼従者伊藤鶴吉を供として東京から新潟県に抜け、日本海側を北上し北海道アイヌ集落平取に至る北日本を旅した。10月からは神戸、京都、伊勢、大阪を訪ねた。

総移動距離は約4,500 km。といわている。

当時の日本、外国人が自由に旅行できる範囲は東京、大阪の半径 10 里以内と横浜、神戸、長崎、函館、新潟の港町に限られていた。それ以外の土地を旅行するには「外国人内地旅行許可」が必要であったが、英国大使館の絶大なる支援があったことが挙げられる。また、従者の伊藤鶴吉は英語が極めて堪能であったばかりで

なく英国で植物学を学んだインテリ、また米国大使館で働いた経験があったことなどから、バートの信頼も厚く日本旅行の成功を支えた。旅行記は現地で妹や友人達に宛てに書いた手紙を中心に構成されたものであるとバードは述べている。また、バードは自分が見たままの日本奥地の風俗、習慣等を書いた。農民の現状について不愉快な描写が多々あろうかと思うが、自分が見た事実を知らせるために提供するものであるとしている。本稿ではそういう部分はカットし、**歩き、距離**に限定してまとめた。





通訳・従者:伊藤鶴吉



バートは絵心もあり、数多 く挿画を残している。

・6 月 10 日:東京英国公使館出発。荷物は柳行李 2 個、50kg。従者伊藤 40kg。人力車用の空気枕、ゴム製浴槽、シーツ、毛布 1 枚、折り畳み式ベッド、着替え、蝋燭、ブランディ、チョコレート少々、プラントン氏の大判日本地図、革の頑丈な編み上げ靴をはき、日本の笠をかぶる。クルマは 3 台、日光まで約 144 kmを車

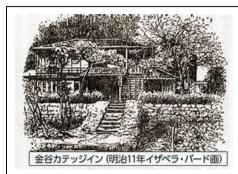
夫は交代せず 3 日で行く予定。通行証にはふつう外国人が通っていいルートが決められているが、大使が行き先制限のなしの通行証を入手してくれた。



プラントン 日本地図 (Wikipedia)

## リチャード・プラントン

1814年~1901年 イギリス・スコットランド出身の土木技術者。1868年来日、明治政府に灯台建設技術者として雇われた。7年6ヶ月の間、灯台26など設計した。日本の灯台の父といわれる。地図はバードが日本奥地旅行にあたって、プラトンがイギリス大使館の依頼により作成したといわれる。





- ・6月13日:栃木県日光着、東京から36里、144km、金谷邸(ホテル)東照宮とも大変気に入り、「日光 結構」と言っている。上右の写真バード自身がスケッチしたもの。以下挿画はすべてバード画。
- ・6月21日、日光金谷邸発。以後、新潟まで約247マイル、101里、396km。(以下1里=3.927kmで換算)。 ルートは現在、日光〜会津若松間の会津鉄道が通っている高山ルート。この間14の村落を通り、川島、大 内の村落を通り、会津坂下、車山峠2泊し7月2日、阿賀野川上流の津川から舟に乗り新潟へ、この間の 風俗等伝えている。各地で外国人見たさの野次馬、しかし恐怖心感じなかった。17の峠を越えた。
- ・7月 3日:新潟市着 東京から約247マイル、101里、396km。人口5万人。日本海側にある唯一つの開港。 外国人18人、この町は清潔で綺麗に掃き清められ泥靴で歩くのがためらわれる。各所ゴミ箱があり、エジン バラにはお手本になる。
- ・7月11日:新潟発、気温日中28℃。日本海側、黒川(452 km)まで北上し内陸部に入り、現在の米坂線、荒川沿いに県境玉川、小国を越え米沢平野に入るとまったくエデンの園と絶唱、赤湯(552 km)、上山(572 km)を経て山形市へ。
- ・7月14日:山形市着(584km)山形市は人口21,000人の繁栄する町。紡績工場を見学、山形の野次馬は辛抱強く息が詰まりそう。尾花沢から眺める鳥海山は素晴らしい。新庄はみすぼらしい町。院内の宿屋はことのほか心地のよい宿屋。湯沢は人口7,000人の町、特別嫌気のしそうな所。横手、700km、人口1万人で木綿の大きな交易場であるが、最大級の宿屋はどこもひどいもの。雄物川を渡し舟で渡り六郷へ。下流の神宮寺から舟で雄物川を下り河口の久保田へ。陸路なら二日かかるところを9時間で河口の久保田へ。
- ・7月22日: 当時、久保田といった秋田市着 新潟から792km。東京から1,196km。秋田市は人口36,000人。 非常に魅力的な日本的な町。城下町ながら城下町につきものの「死人のように生きている」様子はなく、豊かで快適そうな雰囲気がある。以降、馬2頭、荷馬2頭。
- ・7月29日、大舘。秋田と青森に県境、矢立峠、スイスのブリューニックを彷彿させる。8月2日、青森県碇ヶ関、5日、黒石から36km、雨で道路事情悪し、

・8 月 7日:青森市着 新潟から青森まで約368マイル、147里、約588 km。東京から983 km。汽船に乗ったが強風雨のため函館まで14時間かかった。



- ・8月 8日:函館市着。8月12日、函館から馬4頭。函館~ジュンサイ沼~森8月16日着。函館から44km、 汽船に乗り室蘭へ。室蘭は日本人105戸、函館から88km。幌別はアイヌ47戸、日本人18戸、108km。馬で 風光明媚な幌別から白老に至る道は非常に寂しく4~5軒の家しか見当たらない。白老、8月20日、アイヌ 51戸、日本人11戸のアイヌ村、佐留太、8月22日。212km。雨、ハエと蚊に悩まされ悪路を進む
- ・8月22日、目的地平取のアイヌ村着。函館から222km。東京から1,214km。アイヌ53戸。日本人のようにじるじる見つめられることはなく歓迎された。酋長の甥シノデイ等に宗教、風俗、習慣等につき英語・日本語・アイヌ顔を通じて聴取。アイヌ語の単語300を収集。文字はなく1,000以上の数はない。アイヌは正直であり、全体的に人を手厚く持て成し、誠実で敬意に満ち年長者に対し親切である。近くに木造のお堂の義経神社があった義経は自分たちに親切であったという言い伝えがあるという。ロシア人がすでに足を踏み入れており、ロシア人に対してよく思っていないのはイギリス人と日本人だけであるとイザベラは述べている。







左:シノティ



蓑を着たバード 旅行中雨に悩まされた。

- ・8月26日、平取を後にし、佐瑠太、湧別、苫小牧、白老、幌別、室蘭まで戻る。往路は森まで船に乗ったが 復路は陸路で礼文華、長万部、森、函館へ。**道内の移動距離は約358マイル。573 km**
- ・9月14日:函館発 汽船にて横浜へ 函館〜横浜を含めると 2,750 km。 関西・伊勢神宮の旅 580 km、横浜〜神戸間船旅、1850 km。**全行程 4,500 km**。 以上

「余談」イザベルバートの来日目的はアイヌに関心をもったことに始まる。アイヌの言語調査・研究の先駆者と言えば金田一京助であると思っていた。調べてみると、金田一はイザベルが日本にやって来た明治 15 年盛岡の素封家に生まれる。私の高校のころ、3 カ月に一回ほど先輩や著名人を招聘し講演会が行われていた。金田一先生の講演ではアイヌ民族に伝わる叙事詩ユーカラ、言語調査の裏話が少しはあったが、同級生に米内光政や野村胡堂がいたこと。そして2級下に石川啄木がいて、度々、お金を無心に来た話などが中心であった。そして生徒を何よりも驚かした話は、講演に先立ち紹介した教師が、京助は兄弟姉妹 11 人の長男、男 7 人は全員、東大であったことであった。京助の子、春彦、孫秀穂と三代言語学者である。 以上